

2019 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	濱田 幸子
研究テーマ	『伊曾保物語』の成立と江戸時代における受容
研究概要	『イソポのハブラス』と比較しながら『伊曾保物語』を読むことで、この書がどういふねらいで翻訳編集され、一般の日本人を対象とした書物として出版されるにいたったのかを明らかにしていく。『伊曾保物語』の中で、どのような寓話にどのような教訓が添えられているのかを見ていくとともに、『伊曾保物語』の受容のありかたについても考察していく。

1. 研究活動の概要と研究成果	『伊曾保物語』が刊行当初から出版され読み続けられている理由の一つとして、『伊曾保物語』が、冒頭から「伊曾保（イソポ）」という賢人の物語（一代記）という形をとっていることが考えられる。これが日本の編集者の手による作為であることを、同時代に同一の原典からキリシタンによって翻訳され口語ローマ字体で出版された『イソポのハブラス』と、内容・形式を読み比べることによって、明らかにした。『伊曾保物語』では、イソポという賢人の一代記とするために、イソポの伝記が語られる上巻から中巻第9章までに、原典からの話の省略が少なからずあり、話順の入れ替えも複数あり、原典ではイソポの逸話ではない話もイソポの聡明さを示す逸話として幾つも取り入れられていることが分かった。そして、そのように聡明なイソポが問題を解決し人を裁く話も少なからずあることから、江戸時代に新たに出てきた公事物語（裁判評定の物語）への『伊曾保物語』の影響も見えてきている。
2. 学術論文・学会発表等	学術論文「『伊曾保物語』の成立についての再考察」（『佛教大学総合研究所紀要』第27号、佛教大学総合研究所（2020年3月）
3. 今後の課題	今後の課題は、先に1で述べた、江戸時代に新たに出てきた公事物語（裁判評定の物語）への『伊曾保物語』の影響について考察することである。これは、『伊曾保物語』の江戸時代における受容の一つの形である。 また、『伊曾保物語』の寓話部の中で、どのような寓話にどのような教訓が添えられているのかを見ていくことで、賢人イソポの物語である『伊曾保物語』がどのような教訓書として江戸時代に受容されていたのかを考察することである。さらに、江戸時代の書物の中で、『伊曾保物語』の寓話が多数取り入れられている『絵入教訓近道』における『伊曾保物語』の受容についても考える必要がある。